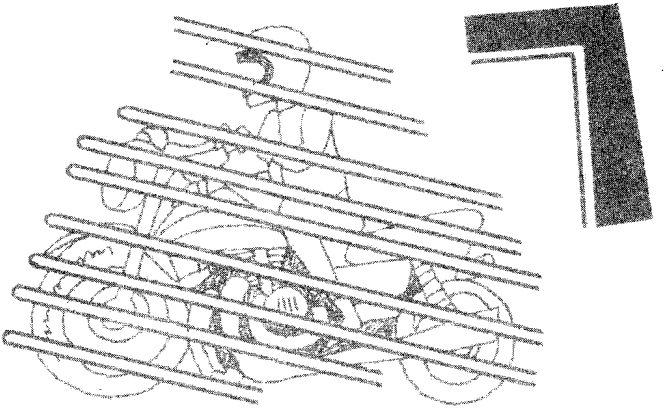
若い葦（あし）

三好京三

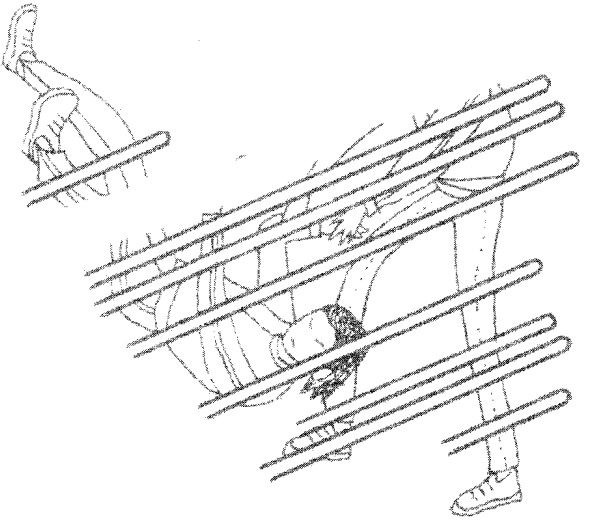
荒れる子どもと体当たり教師



若い葦（あし）

荒れる子どもと体当たり教師

三好京三



若　い　葦(あし)

昭和58年3月20日　初版発行　　定価1100円
昭和58年4月1日　第2刷発行

著　　者　三好　京三
編集責任者　本郷左智夫
発 行 者　黒川　　巌
発 行 所　株式会社学習研究社
東京都大田区上池台4－40－5
郵便番号 145
電話　東京（03）720－1111
振替　東京8－142930

印刷所　信毎書籍印刷株式会社
株式会社金羊社
©1983　Kyozo Miyoshi　Printed in Japan
169－107
ISBN4－05－100306－X

＊この本に関するお問い合せやミスなどがありましたら，文書は，東京都大田区上池台4－40－5（〒145)学研　お客さま相談センター「若い葦」係へ，電話は　東京（03）720－1111へお願いします。
＊本書内容の無断複写を禁じます。

目次

葦毛先生 5
暴力のすすめ 35
独立党 67
若い葦 113
発足 129
秘密 171

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詰問——198
挑発——227
遅れた子——244
バー・レッドローズ——270
天翔ける駒——301

装丁／長尾みのる

葦毛先生

水平線の彼方が浅黄色にかすんでいる。海はそこからしだいに濃い藍色を見せ、手前では緑がかった三角波を浮かべてゆったりとうねっていた。渚におだやかな波がうち寄せ、白くざわめいた。

「ハイヨォーッ」

浦上玲(うらかみれい)は鞭をあげ、朝の空気を深く吸って叫んだ。白馬が駆け出した。たちまちたてがみがなびく。玲の長いポニーテールにした髪も、馬上で水平になった。長い間夢みていた瞬間が、今、自分のものとなっている。

——教師になったならば——

と思っていた。

――浜辺の学校に赴任しよう。初出勤の日は、白い馬にまたがって、渚を駆けよう――

その通りになっているのだ。

「ほらあっ」

玲は何度も叫んだ。玲は少々肥り肉である。しかし固肥りの肉がひきしまっている。頬骨はちょっと高いが丸顔で目が大きく、血色がよかった。

鷹浜海岸は、三陸の海には珍しく一キロメートル以上にわたって砂浜が続いている。そこを思うさま砂を蹴たて、玲は馬を走らせている。二歳の白馬にはゆうべ紋多と名づけた。内陸部でスーパーマーケットを幾つか経営している父親にねだって買ってもらったものである。車の免許も持っている。しかし、馬は車より経費がかからないのではないか？　車が食うのはガソリンであるが、馬が食うのは藁である。

よし経費が割高であろうとも、玲は馬で通勤することを心に決めていた。そのためには勤務地が農村部か漁村部である必要がある。できれば広々とした海の見渡される海辺の学校がよかった。そう思い決めると、渚を馬にまたがって駆ける自分の姿が毎夜のように目に浮かび、その夢が消し切れなくなった。

砂浜は広くゆるやかに湾曲しながら海をかかえこんでいた。その先は磯浜で、松を頭上に化粧った岩が沖に向かって突き出ている。砂浜の終わるところで、玲は渚から道に出た。そこは川が

そそぎこんでいる場所で、川沿いに逆のぼって七、八百メートル行くと、その日から玲の勤務する鷹浜小学校であった。隣接してもう一つ校舎があり、鷹浜中学校である。設計者が同じなのか、全く同じつくりに見える。どちらも鉄筋コンクリート建ての近代建築であった。

途中で多くの子どもたちや、我が子の入学式に付き添う晴れ着姿の母親たちを追い越した。そのたびに玲は、おはよう、と声をかけるのだが、子どもや母親は馬上の玲をおどろいて眺めるだけであいさつを返さない。もっとも玲はGパンに赤の皮ジャンパー姿である。とても、新任の女教師には見えないのであろう。

校庭に入ったときも、遊びをやめた子どもたちは、あっけにとられたように玲を見つめてものを言わなかった。大学生時代には、子どもたちの無邪気なあいさつの飛び交う中を、颯爽と馬で突っ切ってゆくようすを思いえがいていたから、玲は少々気落ちした。それでも、

「みなさん、おはよう。今日からよろしくね」

と愛想をふりまいて校舎の後ろにまわった。古い校舎のころ使ったらしい屋根つきの井戸がとりこわされずに残っており、そこを馬つなぎ場とすることを、前もって校長から許可されている。

紋多をつないで校庭にもどると、ちょうど校門をオートバイが入って来たところであった。これはまたとてつもなく大きな図体で、警察官の乗る白バイなみである。乗り手はヘルメットをかぶり、風防眼鏡をかけている。子どもたちがあいさつをすると、鷹揚に手をあげてこたえた。

「おはよう、ことしもしっかりやろう」
校庭中にひびき渡るような胴間声である。
「ナナハン先生――」
オートバイに追いすがって行く子どもたちもいる。三月まで受け持たれた生徒であろう。
――そうか、七半（七五〇CC）のオートバイに乗って通うから、ナナハン先生なんだ――
とわかった。とするとわたしは……。白馬先生、馬っコ先生、騎手先生、紋多先生――。いずれ、馬に縁のある綽名がつけられるに違いなかった。どの綽名も男っぽい感じがする。少し考えて、
――葦毛先生がいい――
と思った。馬は毛色によって、青毛、鹿毛、栗毛、葦毛と呼ばれ、紋多は白にわずかに黒のさし毛のまじった葦毛である。このことばは風情があっていい。その上、玲が乗馬通勤を思いついたのは、すべて機械化、画一化されてゆく世の風潮にさからいたい気持ちもあってのことである。それは必ずしも時代に逆行するということではないが、紋多のような馬を葦毛と呼ぶ程度のことは、日本の小学生は覚えておいてよいことではないだろうか。
玲は新任教師のあいさつのとき、子どもたちに葦毛についての講釈をした。もちろん、紋多がその葦毛であることもつけ加えた。そして、もし綽名をつけるなら、「葦毛先生」と呼んでほし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いと頼んだ。

最初の試練がやって来た。もう二、三日で天皇誕生日という、木曜日のことである。玲の受け持っている五年二組の岸山宏に、職員室で起きた盗難の嫌疑がかけられたのだった。

「言わないことじゃない」

三角な目をした、色の黒い教頭の足野が言った。放課後の職員室であった。

「子どもの前歴は、こういうことを未然に防ぐためにも、よくわかっていたほうがいいのです」

「犯人は宏と決まったわけじゃありません」

と玲は抗弁した。

「決まっています」

教頭は自信ありげだった。

「きのうの午後、職員室に入って来た生徒は限られている。その中でも、机の上の一万円を盗まれた貝沢先生の机のそばに来たのは、岸山宏だけなんです」

貝沢初子という四年生担任の女教師は、玲と机を並べていた。きのうの午後、玲は教室にいて、岸山宏に、職員室の玲の机の上から学級日誌を持って来るよう言いつけている。

「盗癖は直りづらいんです。まったく直らないと断言する教師さえいる。だから前もって生徒一

人一人の学業成績、生活態度の双方について、調べてかかるべきだったんです」

しかし、玲は先入観によって子どもに接するのはいやだった。始業式の日、新任教師の玲に受け持たれた三十七名の子どもたちは、ひとりのこらず、輝く笑顔で玲を教室に迎えたのだった。

玲自身にも覚えがある。小学校、中学校を通じ、新学期が来るたびに、こんどの担任は誰先生だろうと胸ときめかしたものだ。好きな先生の場合は持ち上がられるのが嬉しかったが、嫌いな先生の場合はげんなりである。最もさわがれるのが新任の先生で、そういう教師に受け持たれた学級は、あからさまな羨望を他のクラスの者たちから受けた。

玲は三十七人の子どもたちから、新鮮な期待をもって迎えられたのであった。その中の誰が頭がよくて誰が悪い、どの子が素直で、どの子が小生意気だなど、選別、差別の先入観で接したくはなかった。

その上、公簿となっている学習指導要録は、前担任の教師が記入したものである。子どもたちは、せっかく担任が変わって新しい気持ちでいるのに、新担任によって指導要録が丹念に読まれた結果、前の先生と同じ目で扱われたりしたら、これ以上にうっとうしいことはないであろう。よしんば低学年時代に少々の失敗をしたところで、人間、誰でもが失敗の連鎖の中で生きている。それには目をつむって、全員が全く同じライン上からスタートすべきだというのが玲の考えであった。

「一万円とは額が大きい。今回は宏も度胸が大きすぎました。厳重に調査してください」
教頭の足野は、犯人が岸山宏であることについて、ゆるぎのない自信を持っているようであった。玲は不服な顔のまま教頭の前に立っている。
「調べ方を教えてあげますよ。葦毛先生」
肩に手をかけた教師があった。ナナハンであった。名を塩沢といい、六年一組担任である。
「子どもたちは？」
「みんな帰りました」
気のすすまぬ声でこたえた。
「なら、宏の家庭を訪問しましょう。いらっしゃい」
塩沢は大股に歩いて職員室を出た。彼もまた、犯人が岸山宏だと確信している物腰である。仕方なしに玲はあとを追った。
職員昇降口で靴をはいていると、重くはずむような音をさせて、塩沢の七半がやって来た。ハンドルの下に、太い銀の蛇のような管が四本うねっている。それに接続されているエンジンは、磯浜の岩石のように盛り上がって見えた。大仰なオートバイに乗っているものである。もっともこれも、玲と同様、乗用車万能の時勢に反逆する意味があるのかも知れなかった。
「乗りなさい」

塩沢は顎をしゃくって後部座席をさした。
「馬と七半が並んで走ってはめだちすぎる」
玲は脚をはね上げてまたがった。相変わらず赤の皮ジャンパーにGパンだから、このようなときはつごうがよい。
「しっかり腹につかまってください。それとも男に抱きつくのはいやですか？」
「いいえ、固め技の稽古で慣れてますから……」
玲は言われたとおりにした。
「へえ？　葦毛先生は乗馬だけではない、柔道もなさる」
エンジンをふかして車をゆっくり走らせながら、塩沢はおどろいたようすだった。
「大学に女の柔道部はなかったから、男子の部に入っていたんです。二段です」
「ほう、それはこわい」
と言ったが、実際はこわがっている口調ではなかった。塩沢も体軀が堂々としているから、柔道か何かをやるのかも知れない。
岸山宏の家は山手にあった。学校は浜辺に近い川端にあるが、学区は浜手、市街地、山手と三地区に分かれている。宏の家はそう新しくはないが瓦ぶきで、落ち着いた玄関構えであった。庭先でエンジンを止め、七半から降りると、塩沢は勝手知ったように玄関の戸を開けて、宏！　と

中に声をかけた。玲も広い三和土に立った。
おじけづいたような目をして宏が茶の間から出て来た。そして、塩沢のそばに玲もいるのに気づくと、よけいに表情を固くした。
「どこに隠した？」
と塩沢は高飛車に訊いた。
「何を……」
かすれたような声で宏は訊き返す。
「決まっているだろう。一万円だ。お前は千円札なら使えるが、一万円札は使えない。どこかに隠したはずだ」
「知らねえ」
「嘘をつけ。お前が盗ったことははっきりしている。正直に隠し場所を言え」
「知らねえ」
「ほんとだな！」
塩沢は怒気を含んだ声になった。宏の表情に、一瞬おびえが走った。
「目をつむれ」
「何して？」

「いいから目をつむれ」
「……」
宏は玄関先に立ったまま目をつむった。瞼がぴくぴく痙攣(けいれん)している。顔からははっきりと血の気がひいていた。
「殴るぞ！」
びくりと宏の体がふるえた。
「もし家の中を探して、貝沢先生の一万円札が見つかったらお前を殴る。貝沢先生はあの札の番号を偶然ひかえていたのだよ。ＬＳ６４２３１２Ｅだ。いいな。じゃ、部屋に入るぞ」
逮捕状でも手にした刑事のように、家の中に踏みこむといったいきおいで塩沢は靴をぬいだ。あわてたように目をあけ、宏はとめようとしたが、たちまち押しのけられた。
塩沢は茶の間に入った。玲も上がり、
「盗ってないわね」
と宏の坊主頭を撫でた。宏はこたえなかった。
「盗ったの？」
それにもこたえない。
「はっきり言ってちょうだい。先生はあなたを信じてるわ。ほかの先生方みたいに、あんたを色

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com